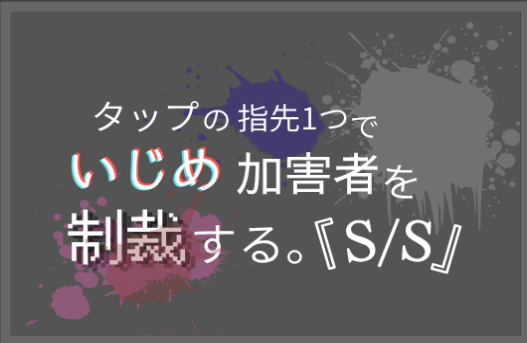




タップの指先1つで
いじめ加害者を
制裁する。『S/S』

「それでは、彼女への制裁を選択してください」

穏やかで、淡々とした男の人の声。姿は見えないのに、背中を強く押された気がした。

僕は、わずかに震える指先で空中に浮かんだ透明な画面に触れる。それだけなのに、すごく重たい動作に感じる。薄いガラスみたいな画面は、触れると僕の指先の持つ熱でうっすら曇り、点や線状の指跡がつくのが分かる。

——これは、夢のはず。それなのに、現実よりもリアルな実感があった。

「いやあだー！！来ないで、来るなっ！！…誰か助けてえっ！」

甲高い声に、ハッとした。聞き覚えしかない。
イヤな記憶を呼び覚まされそうで、軽く吐き気がしてくる。

おずおず目を向けると、大画面に映し出されたOL風の女が、おびえた顔で叫んでいる。

ここまで必死で走ってきたせいで失くしたのか、靴を履いていない。たしか、エナメルのヒールを履いていたはず。カツカツ音がしていた。

SNSでは実名を公開していて、高そうなブランド物で着飾り、濃いメイクをして笑顔を作る。

僕に言わせれば、性格の悪さがにじみ出ている顔だ。
わざわざ晒す気が知れない。

それが今、あの女の顔は恐怖で歪み、髪が乱れてぺったりと額に張り付いている。おまけに涙目だ。

逃げながら振り返ると、視線の先には2メートル近くありそうな浅黒い肌の男が1人。

30代くらいで銀髪で、渋めのイケメンに見えなくもない。
建設の現場関係か、裏社会で用心棒でもしてそんな感じだろうか。
薄地のVネックシャツに、少しくたびれたズボン。
胸が盛り上がり、腕が太い。筋骨隆々としているのが見てとれる。

男は口元に笑みを浮かべて平然としている。
そして逃げ惑う女との距離を早歩きで着実に縮めていく。

ついに袋小路に飛び込み、自ら逃げ場をなくした女の腕をがっしりと捕まえた。

僕は、その展開に思わず小さくガッツポーズしていた。

「触るなっ、やめろ！誰だよ？！キっっモ！！」

トーンダウンはしたものの、まだ諦めていないことが分かる声色。
僕は、たまらず見えない声に話しかけた。

「あの、僕。設定を追加したいです…」

「はい、なんでしょう？」

「…あの女の声、聞きたくない。それに顔も見たくないです」

「なるほど了解しました。では、オプションから選択してください」

促されて、また画面に向き直って選択をしてゆく。

先程はなかったオプションの選択肢があった。

映像の向こうで、男はしばらく動作を止めていた。

それがおもむろに動き出すと、女性の口に布のようなものを押し当てた。

「ふゝえ？ …っ…」

もがいていた身体から急に力が抜け、ぐったりとなる。

男はにたりと歯を見せて笑いながら、意識をなくした女を後ろから手を回し抱いていた。

さらに、隠し持っていた目隠しをシュルツと取り出し、捕らえた獲物の目を覆う。

「これで、宜しいですか？」

姿のない声に確認されて、僕は頷く。まさにこういうことを求めていたから。

女の胸元へ伸ばされた男の手が、服越しにまさぐる。獣みたいに激しい、欲望そのままの手つきだった。

「っ… んゝ、んー…」

男の筋張った大きな手のなかで、ぐにぐにと揉みしだかれ、形を変える胸。

乳首が立ったのか、服越しに主張している。

その膨らみを太い指でぎゅうっ、ぐにぐにいつと何度も摘まれたあとはグリグリと押し込まれている。

あんなしごきかたをされたら、きっとすぐに腫れて黒ずんでしまうだろう。…いい気味だな、と内心想った。

意識をなくした女、麻美はさらに男の手でみるみるうちに裸に剥かれていく。

フリルシャツのボタンが飛び、黒色のタイトなひざ丈スカートをずりりと引きずり下ろされる。

濃い肌色のストッキングが裂ける音がした。

ゴテゴテとしたレース飾りつきの紫色のブラジャーも、グイグイと引っ張られて引きちぎられる。

乱雑に揉まれていた胸は赤みを帯び、乳首は色が薄いもののピンクというより赤茶色で、乳輪もけっこう大きい。

(あんな胸してたのか…腹の肉が余っててだらしがない)

何も知らない人が見たら、スタイルが良いとか、気の毒になぜあんなことをされているのか？と思うだろう。

でも、僕にとっては麻美のすべてが醜く映る。

これまでの展開に、すでに後ろ暗い興奮すら覚えている。

場面が、いつしか室内に切り替わった。

小窓には黒いカーテン。壁はコンクリート打ちっぱなしで、所々に汚い落書きがある。狭い上に埃っぽそうで、床に放置されたマットレスもシミだらけで薄汚れて見える。

おまけに空調もついていないようで、男ははあはあと息をつき、額にはギラギラと汗が光る。

スタンドの白い照明が、ベッドに向けられ眩しいほどに照らしている。

男は麻美にのしかかり、興奮をあらわに太ももを撫でさする。首すじに腋、ヘソに顔を近づけては体臭を嗅ぎ、しつこくベロリと舐めあげる。

さっきまで全力で走っていたのだ。汗の味がするだろうと想像した。

麻美は声を出さないものの、時折ビクッと反応している。

僕はその光景の前で立ち尽くし、呆然となっていた。
正直見たいとは思っていなかった。でももう、目が離せない。

男の手は麻美の股間に伸び、ストッキングの裂け目を拵げた。
太く長い指が布の少ないショーツのクロッチ部分をつまみ、ヒモみたいに引き伸ばす。

少しゆるんだすき間から、指がズブッと秘孔に潜り込む。

麻美のそこは男の太くて長い指2本を飲み込んだ。

麻美の眉間にはシワが寄る。でも、…血がにじむ様子はない。

(…初めてなわけないか。あんなのが入るくらいだし)

この状況に慣れ始めた僕は、冷静にじっと観察していた。

すぐに感じやすいスポットを探り当てた2本の指が、ピストンみたいな動きをし始める。

グチュグチュ、ジュプ、グチュウッ！！

「あ、はっ♡♡う…！」

麻美の顔も赤くなり、こめかみに汗がにじんでいるのが分かる。
熱にうかされたうわ言みたいに、小さく声を上げている。

卑猥な音をたてる股間からは愛液が垂れ出し、いくつものすじになって
尻を伝っている。

侵入している指は、何と親指以外すべての4本に増えている。
麻美は身体をよじり、異物感をのがそうとしてるようだった。が、そんなの
はあの男の前ではムダな抵抗だ。

男は手マンに飽きたか、欲望が限界なのか。
慣れた手つきで手早くベルトを外し、ズボンをおろした。

ブルン、と取り出されたモノは、重力に逆らうみたいに上を向いている。
細い腕くらい太く、赤黒くて遅しい。
カリ高の先端はローションを塗りたくったみたいに濡れ、先走りが垂れて
いる。

男は麻美の足首をつかんで、大きく開かせ、易々と股の間に陣取る。
肉茎は、長さが麻美のへそ上あたりまでゆうにあるようだった。

(あんな凶悪そうなのを挿れられるのか…)

興奮のせいか、思っていたより何も感じない。

男は、すっかり濡れてくば、と小さく開いている秘孔を指で拵げた。グ
チュ、という音がする。

すぐに肉茎をあてがうと、力強く腰を突き出した。

「んあゝ…！ お、ぐ…！！」

貫かれた麻美は苦しように眉を下げ、口から小さく声が漏れた。

男は肉茎がなじむのを待たず、激しいピストン運動で麻美のマンコの奥まで突いている。

鷺掴みにされた胸は乳首が硬くなり立ち上がっていた。男が手を離すと、赤く指の跡がついている。

激しい動きに翻弄されて、ゆさゆさっと胸が揺れる。
Dカップくらいはありそうだ。着やせしていたらしい。

こうしてみると、ただのAVをみている感覚にもなる。
麻美の顔はアイマスクで隠されているし、胸やスタイルだけはAV女優並みかもしれない。

浅黒い肌の男は恍惚の表情をして、肉茎を奥に押しつけ、グリグリと腰を回してナカをかき回す。

麻美は腰の下に手を差し込まれ、腰を反らせた体勢になっていた。より奥深くまで肉茎が届くようで、身体がビクビクしている。

さらに、回された男の両手で尻肉をしっかりとつかまれた。指の間からはみ出る肉。指が食い込んでいるのが分かる。窄まってヒクつく後ろの穴まで見えている。

それまで斜め上からだったアングルが、だんだん結合部に近づく。そして、そこが大映しになった。

僕は、それを食い入るように見ていた。

（僕を散々馬鹿にしてきたあのオンナが、自由を奪われてひどい目に遭わされている…！）

どす黒い感情しかない。けれど、愉しんでもいた。

<中略>

男は麻美の両手首を後ろへ引くと、上半身を起こさせた。そして首や背中にも爪を立てるようにし、口を大きく開けてしゃぶりついている。

片手が麻美の髪を掴んだ。まるでリードを握った犬の飼い主みたいだ。

髪を引っ張られるのはイヤなのか、麻美は苦しそうだ。

男は触りやすくなった麻美のおっぱいに手を回し、ぐにぐにと揉みしだく。すぐに固くなって尖った乳首はVの字を作った指で挟まれ、グリグリと刺激を与えられている。

「お♡お、ほおっ、おおん♡♡！」

意識はない麻美が、オホ声まであげている。

（アイツ…もしかして、強引なプレイで感じてる？）

そんなことを考えて、胸がチリチリする。

チャイムの音が鳴ったのはどのくらい前だったか。
放課後、呼び出された場所へ行くと4人の女子がいた。
僕は折り重なった机や椅子の影になる教室の隅に追いやられた。

女子達は明るめの髪色で、容姿は比較的良好い。

「お前なあ、ほんっと空気読めねえのかよ！」

「…っ、すみませ…」

「もっとだよ、もっと謝れ！」

「何で麻美がカンニングしたとかチクるんだよ、よりによって担任に」

「……」

「お前の見間違いなんだよ。どクズ眼鏡！マジ迷惑なんだけど」

僕は、麻美の前で深々と頭を下げる羽目になっていた。

悔しさしかない。でも、この教室に足を踏み入れて、この女たちと対峙した瞬間、こうでもしないと帰してもらえないと思った。

でも、麻美のカンニングは誰が何と言おうと事実だ。

1年後の受験を見据えた重要な模擬テスト。

担任がカンニング対策にと席をシャッフルしたため、たまたま麻美の隣の席で受けることになった。そして、僕は見てしまった。

迷った末に、覚悟をして担任の教師にカンニングを報告した。

担任は、麻美を呼び出して中途半端に説教でもしたのだろう。

(…なんで、僕の名前が麻美に知られてるんだよ。どうして?)

髪を掴まれ、引っ張られる。泣きたくなるくらい痛かった。

ビンタも飛んでくる。

床に這いつくばるよう言われて、従うと頭を踏みつけられた。

「もう余計なことすんなよ？クソ雑魚眼鏡」

「今度は眼鏡だけじゃ済まないから」

脇腹に麻美の蹴りが入り、僕は呻いてうずくまった。

床に転がる僕をたっぷりと嘲笑い、あいつらは教室を出ていく。

(絶対。絶対に、許さない……)

でも、僕にできたのは、また目をつけられないよう息を殺して振る舞うことだけ。それでも麻美の虫の居所が悪いと呼び出されて散々に見下され、暴言を吐かれるか暴力を受ける。

原因を作った担任教師は、気づいていながらいじめを黙認した。
地獄の日々は、1年近く続いた。進学だけを望みにひたすら耐えた。

いまは社会人。でも、普通を装う仮面の下では受けたいじめのフラッシュバックに苦しんでいる。通勤中、工作中、シャワーの最中。そして、夢の中でさえも。

もう〇のうか、とも思う。それが何度繰り返されたかわからない。